

石神遺跡(第17次)の調査

—第134次

1 はじめに

石神遺跡は飛鳥寺の北西に位置する。明治35年(1902)に須弥山石や石人像が出土し、『日本書紀』にみえる饗応施設との関係が注目されてきた。

1981年より奈良文化財研究所が継続して実施してきた調査成果から本遺跡は3つの大きな遺構変遷があり、これをA～C期と呼称している。

A期は斉明朝を中心とする時期で、さらに3時期に細分が可能である。遺構が充実する時期で、方形区画の内部に大形の掘立柱建物や井戸を配置していたことが明らかになっている(図97)。

つづくB期(7世紀後半・天武朝)には、A期の建物をすべて解体して整地し、掘立柱建物を建てるが、A期に比べて建物は集中せず、配置も異なることから、性格が変化したと考えている。

C期(7世紀後半～8世紀初頭・藤原宮期)には再び建物の構成を変え、この段階まで性格を変えつつも大規模な施設群が存在していたことが判明している。

遺跡は南方に位置する水落遺跡から、北方の阿倍山田道との間をその範囲と考えてきたが、飛鳥藤原第110次(石神遺跡13次調査、2000年、以下第13次調査と称する。他の次数も同様)、同116次(第14次調査、2001年)調査において大規模な東西石組溝SD3896とその南の掘立柱東西塀SA3893・3895の存在が確認されたことにより、これらが斉明期の中心建物群の北辺を区画する施設である可能性が指摘された(『紀要2001』)。

この成果を受けて区画施設の北方でおこなった飛鳥藤原第122次(第15次調査、2002年)、同129次調査(第16次調査、2003年)では、遺構が希薄になる状況を確認し、想定を裏付けることとなった(『紀要2003』・『同2004』)。加えて、区画施設の北方一帯はA期には沼沢地であったことが明らかとなり、その詳細や石神遺跡の中心建物群と阿倍山田道の間が存在する空間利用を検討する必要性が生じた。

これを受けて、本調査では区画施設北方の詳細な占地状況、およびA期以前の状況の検討を目的として調査をおこなった。

本調査区は第15・16次調査区の東方に接し、既存の畦畔を保護する必要から南北2つに分かれる。これを便宜上北区、南区と呼称する。発掘面積は計約654㎡。調査期間は2004年4月1日～10月7日である。

基本層序は、上から水田耕土、床土、遺物包含層、整地土、7世紀以前の自然堆積土(青灰色土・青灰色砂・灰色砂)の順となる。調査は主に包含層、C期整地土(灰褐色土)、B期整地土(北区:黄灰色土、南区:赤茶色土)、A期整地土各層(北区:暗灰色粘質土、南区:茶灰色砂質土・灰茶色シルト・黄斑灰色粘土・灰黄色粘質土)の上面で遺構の確認作業をおこなった。

調査区内は遺構が希薄であった。遺構が確認できない部分で、A期以前の状況を調べるため北区、南区、礫集中の計3ヶ所で断割調査をおこなった。

遺構確認面の標高は、A期整地土の下面で97.8m(北区東北部)～96.8m(南区南部)である。

2 検出遺構

遺構には掘立柱塀、溝、土坑、自然流路がある。ここでは、年代順に遺構を報告する。

A期以前

沼沢地SX4175・4176・4177 第15次・16次調査により、今回の調査区西方は飛鳥時代以前には、沼沢地SX4050とされている(『紀要2003』)。これと一連の堆積土の範囲は、調査区中央にある礫集中SX4177をはさみ、平面的には南北二股に分かれる。北をSX4175、南をSX4176とする。断割調査の結果、SX4177の砂礫はかなりの厚さがあること、SX4175・4176の堆積土の下に潜り込むことを確認し、礫の集中は自然地形の尾根の先端部であった可能性が高くなった。また、SX4175・4176の堆積土は粘土と砂の互層で、流水による自然堆積である。

また、部分的ではあるが、調査において確認できた岸の傾斜はいずれも急勾配をもち、SX4175・4176は谷状の地形を形成していたと想定できる(巻頭図版4)。遺跡周辺の微地形からみると、水は基本的に西～北西の方向に流れ、飛鳥川に合流するのであろう。

なお、堆積土をSX4177上面より深さ1.5mまで掘り進んだが、湧水が激しく、掘り下げを断念した。堆積土からは、古墳時代中期の土器が出土し、埋没の進行過程における年代の一点を示している。

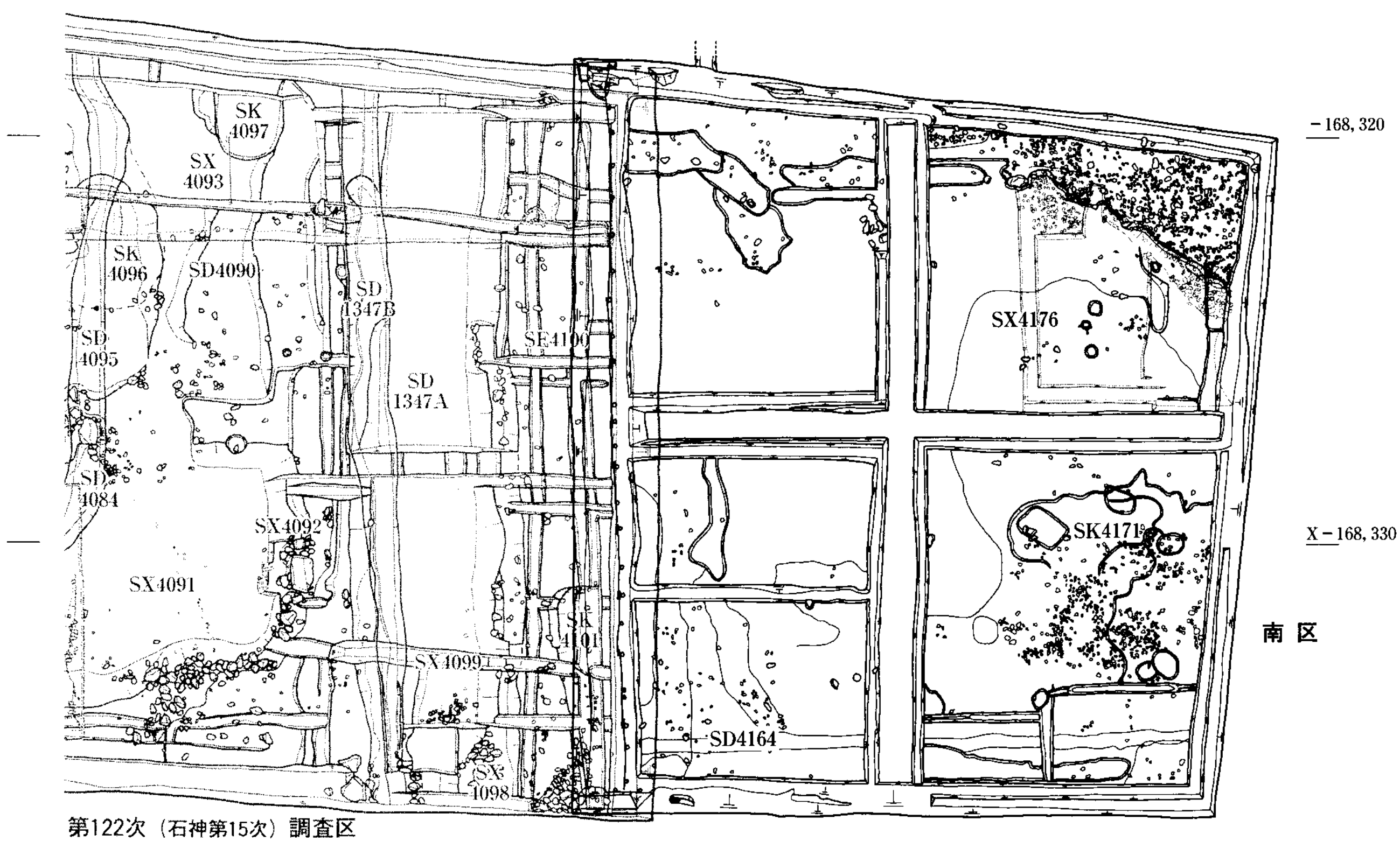
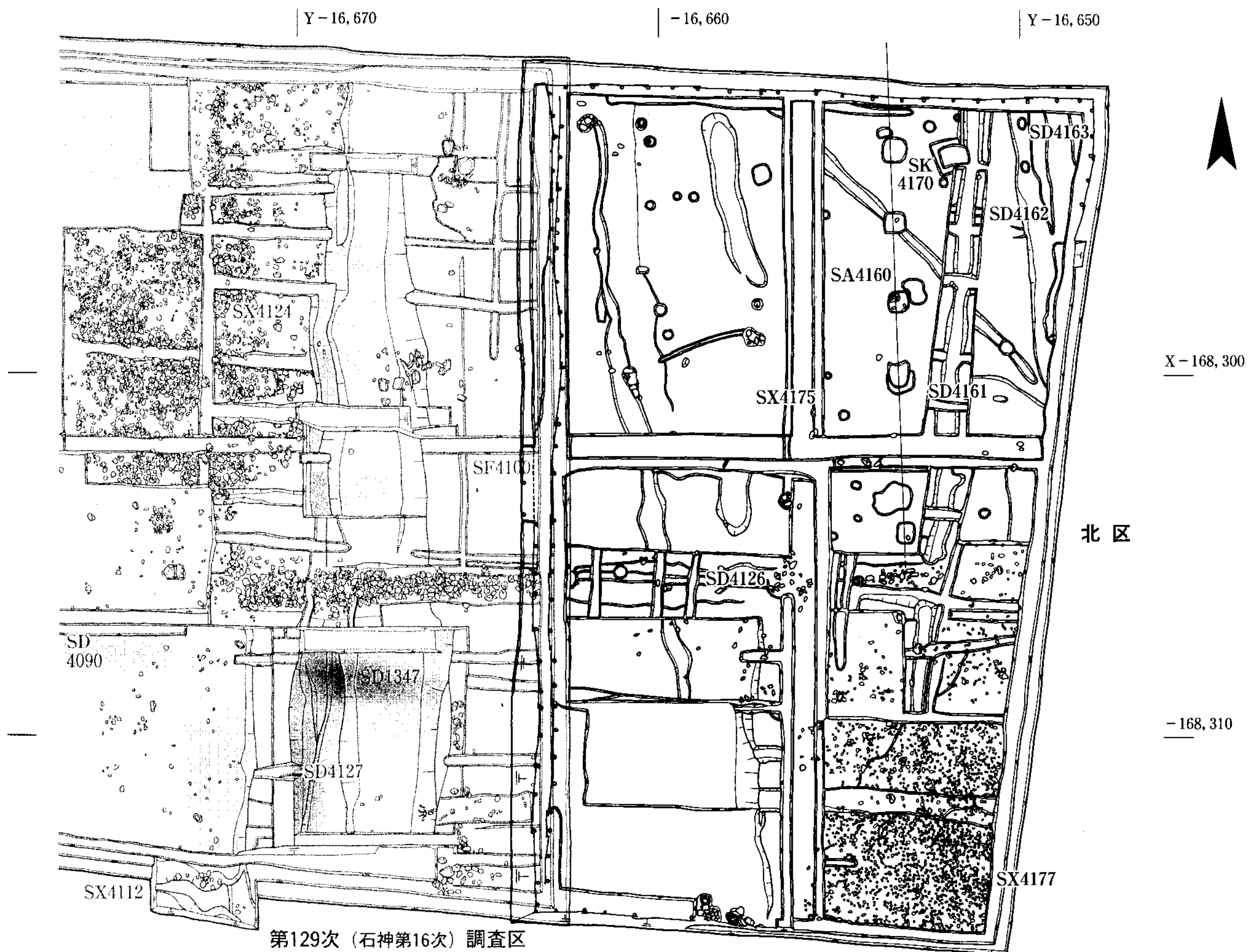


図102 第134次調査遺構図 1:200

A期（飛鳥時代前葉～中葉）

この時期の遺構は少なく、主に整地に関連する遺構を確認した。

東西溝SD4164 南区南端で確認した溝。幅約30cm、深さ約10cm。黄斑灰色粘土上面で確認した。溝の上部は灰色の粘質土であるが、溝の中には円礫を詰めた状況を確認することができた。このことから飛鳥時代前半の暗渠と考える。

土坑SK4171 南区東南部の黄斑灰色粘土下で確認した不整形の土坑。多量の土器や加工痕のある木片、種子、炭化物を含む。

B期（天武朝～持統朝中頃）

B期・C期に属する遺構は、年代の根拠となる遺物の出土は少なく、重複関係や整地土による相対的な変遷のみが判明している。第15・16次調査における整地土の所見を参考にB期とC期に区分したが、詳細な時期の特定はできなかった。

南北塀SA4160 北区東北部で確認した掘立柱列（図103）。柱穴5基を確認し、柱間は約3m。柱の抜取痕跡を明瞭に残す。周囲に対応する柱がないことから、掘立柱塀と考える。礫集中SX4177では柱穴を確認できない。SD4161に先行する。

南北溝SD4162 北区東北部で確認した素掘溝。幅約1.0～1.2m深さ15cmで、灰色の粘質土が堆積する。後述するSD4161およびSD4163に先行する。

南北溝SD4163 北区東北部で確認した素掘溝。幅約1.0m、深さ10cmで、灰色と明褐色の砂が堆積する。整地土の差異から後述するSD4161に先行する。

C期（藤原宮期）

南北溝SD4161 北区東北部で確認した素掘溝。幅約60cm、深さ約20cm。褐色土が堆積する。後述する土坑SK4170に先行する。

土坑SK4170 北区東北部で確認した不整長方形の土坑。堆積中に炭化材を含んでいる。細片ではあるが、土器が出土し、C期以降と考える。

奈良時代以降

東西溝SD4126 北区南部で確認した素掘溝。幅約1.2m～1.5mで、第16次調査で確認した溝の延長部分にあたる。堆積土中に多量の石を含む。水田耕作時の暗渠の可能性はある。

（金田明大）



図103 南北塀SA4160（北から）

3 出土遺物

出土遺物は多岐にわたる。おもに木簡、工房関連資料、土器、土製品、瓦に分類できる。

木簡 木簡は、北区西南部、第15次調査区埋戻土、第16次調査区埋戻土から各1点出土した。このうち釈読できるのは第15次調査区埋戻土のもので、「□〔以カ〕上人同野上人」と書かれている。上下両端の左右に切り込みを有する付札状の木簡（031形式）。上端折れであるが、切り込みの下半部は残存する。長さ（99）mm・幅26mm・厚さ5mm。第15・16次調査ではSD1347・4090・4121を中心とした遺構から木簡が多量に出土しており、これと関連するものである（『紀要2003』・『同2004』）。（市 大樹）

木製品・金属製品・石製品 整理用コンテナで20箱分が出土した。木製品には火鑽板・部材などがあるが、数は少ない。

工房に関連する遺物として鉄板・砥石・羽口・埴塼・ガラス小玉鑄型・琥珀玉・水晶・長石・亀甲などがあげられる。主に黄斑灰色粘土層と、茶灰色砂質土から出土した。これらは装飾品に関する素材と加工用具であり、

付近に生産をおこなった工房の存在を想定することができる。

滑石製模造品は谷の堆積土及び礫集中区の礫の間から出土した。白玉、勾玉、円盤等がある。時期の詳細は不明であるが、特徴から古墳時代に属するものである。いずれも完成品であり、製作過程を示す未成品はないため、谷の埋め立てに伴いおこなわれた近隣の古墳の削平等に起因すると考える。

サヌカイトの剥片および石器は121点出土し、このうち剥片が110点を占める。他に石鏃・スクレイパー・ドリル・ピエスエスキューなどがある。

(渡部圭一郎・金田明大)

土器・土製品 土器は各層から出土したが、なかでも初期の整地土である黄斑灰色粘土、茶灰色砂質土の両層からは多量の資料が出土した。大型の蓋や鉢、異形蓋といった特殊な器種を含む。まず、黄斑灰色粘土および関連する土坑SK4171出土の遺物について概要を示す(図104・105)。飛鳥Ⅰ期を主体とし、古墳時代のものが混じる。

土師器杯C(1)は深手のもので、外面は下半部にケズリをおこない、粗いミガキを施す。内面は太い放射状暗文を施す。橙褐色。口径12.6cm、器高5.1cm。

土師器杯G(2)は外面底部周辺に指頭圧痕を残す。また一部に輪積痕跡が残存する。暗褐色。口径12.4cm、器高4.1cm。

土師器杯H(3)は口縁部より少し下からケズリをおこなう。橙褐色。口径15.0cm、残存高4.5cm。

土師器鉢(4)は大型のもので、口縁端部に平坦面をもつ。外面は下半部にケズリをおこない、全体にミガキを施す。内面は見込から逆U字状に太い放射状暗文を施した後、口縁部直下に螺旋状暗文を施す。橙褐色口径32.8cm、復元高9.4cm。

土師器高杯(5)は杯部外面下部にミミズ腫れ状の粘土の高まりを製作痕跡として残すもので、内面に粗い放射状暗文を施す。暗褐色。口径15.2cm、器高12.6cm、脚部径10.0cm。

須恵器蓋(6~13)のうち、杯の蓋(6~10)にはつまみや全体の形状に差がある。(6)は宝珠形のつまみをもち、かえりが突出する。灰色。口径11.6cm、器高3.3cm。(7)も同様の特徴をもち、青灰色。口径11.6cm、器高3.4cm。(8)はかえりが突出しない。灰色。口径12.2cm、器高3.0

cm。(9)は中央が凹んだつまみをもち、かえりが突出する。青灰色。口径9.6cm、器高3.0cm。(10)はつまみの横に1ヶ所の穿孔がある。使用法は明らかではない。灰白色。口径13.2cm、器高3.6cm。(11)は端部が屈曲して外方を開く特異な形状を持つものである。壺等の蓋になると考える。同じ層からはこれより大型の類似品も出土している。青灰色。口径13.3cm、器高3.1cm。(12)は高杯の蓋と考える。扁平なつまみをもち、屈曲部に明瞭な稜をもつ。蓋部上半に回転ケズリをおこなう。青灰色。口径13.4cm、器高5.1cm。(13)は大型の蓋である。本調査では少なくとも12個体の大型の蓋があり、出土土器の特徴のひとつといえる。外面には緑色の自然釉がかかる。灰白色。口径44.6cm、器高10.7cm。

須恵器杯H(14~16)は いずれも底部外面に回転ケズリをおこなう。(15)・(16)は底部にヘラ記号をもっており、(15)は一本線、(16)は* (アスタリスク) 状の記号が焼成前に描かれている。(14)は灰色。口径10.8cm、器高3.4cm。(15)は青灰色、口径13.0cm、器高3.5cm、(16)は灰色。口径12.4cm、器高3.6cm。

須恵器杯B(17・18)は胴部下位に稜をもち口縁部が外反するもので、高い脚部をもつ。脚部に(17)は3方向に方形、(18)は3方向に円形の透かし穴をもつ。共に青灰色。(17)は口径16.6cm、器高9.6cm、(18)は口径16.4cm、器高7.4cm。

須恵器杯(19)は口縁部を強い回転ナデによって外反させるもので、底部は工具で回転切り離した後、粗いナデのみをおこない、粘土のバリが残る。灰白色。口径10.8cm、器高3.9cm。

須恵器高杯(20~22)は長脚のものと短脚のものがみられる。長脚のうち(20)は2段3方向の方形透かしをもつ。青灰色。口径14.0cm、器高20.4cm、脚部径15.8cm。

(21)は2段2方向の方形透かしをもつ。灰色。口径11.8cm、器高16.1cm、脚部径14.5cm。短脚の(22)はやや焼成が不良のもので明灰色である。口径12.8cm、器高6.0cm。須恵器鉢(23)は大型のもので、半球形の鉢部に脚部をつけた形状のもの。口縁端部を平坦につくる。脚部は高く、外方に踏ん張っている。鉢部との接合部付近に3方向の台形の透かし穴を穿孔し、ヘラ状工具の先端を押し付けた痕跡が残る。内外面共に回転ナデをおこない、丁寧な作りである。青灰色。口径34.6cm、器高16.0cm。

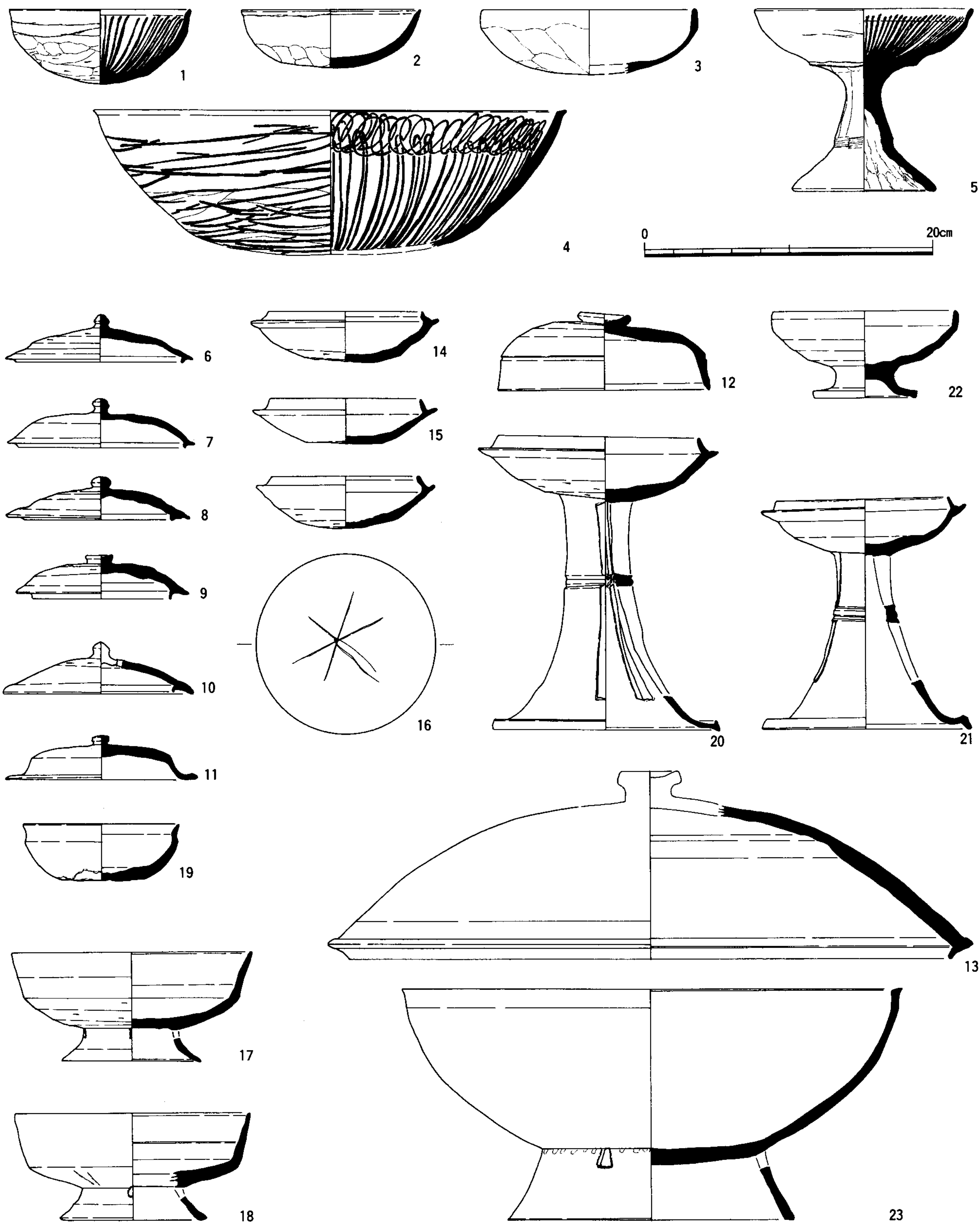


図104 黄斑灰色粘土出土土器 1:4

茶灰色砂質土は黄斑灰色粘土の上にある整地土で、土器群も黄斑灰色粘土と共通する特徴をもつものが大半である。出土土器は量が多く、多彩な器種があり、上下の各層と接合するものも多い。ここでは、特筆できる資料を中心に報告する。いずれも飛鳥Ⅰ期。

土師器高杯(24)は杯部内面に放射状暗文および螺旋状暗文を施す。杯部下部外面には粘土円盤の痕跡が明瞭に残存し、円盤状の粘土板に粘土をまきつける形で杯部の成形がおこなわれたと考える。赤褐色。口径15.8cm、残高4.3cm。

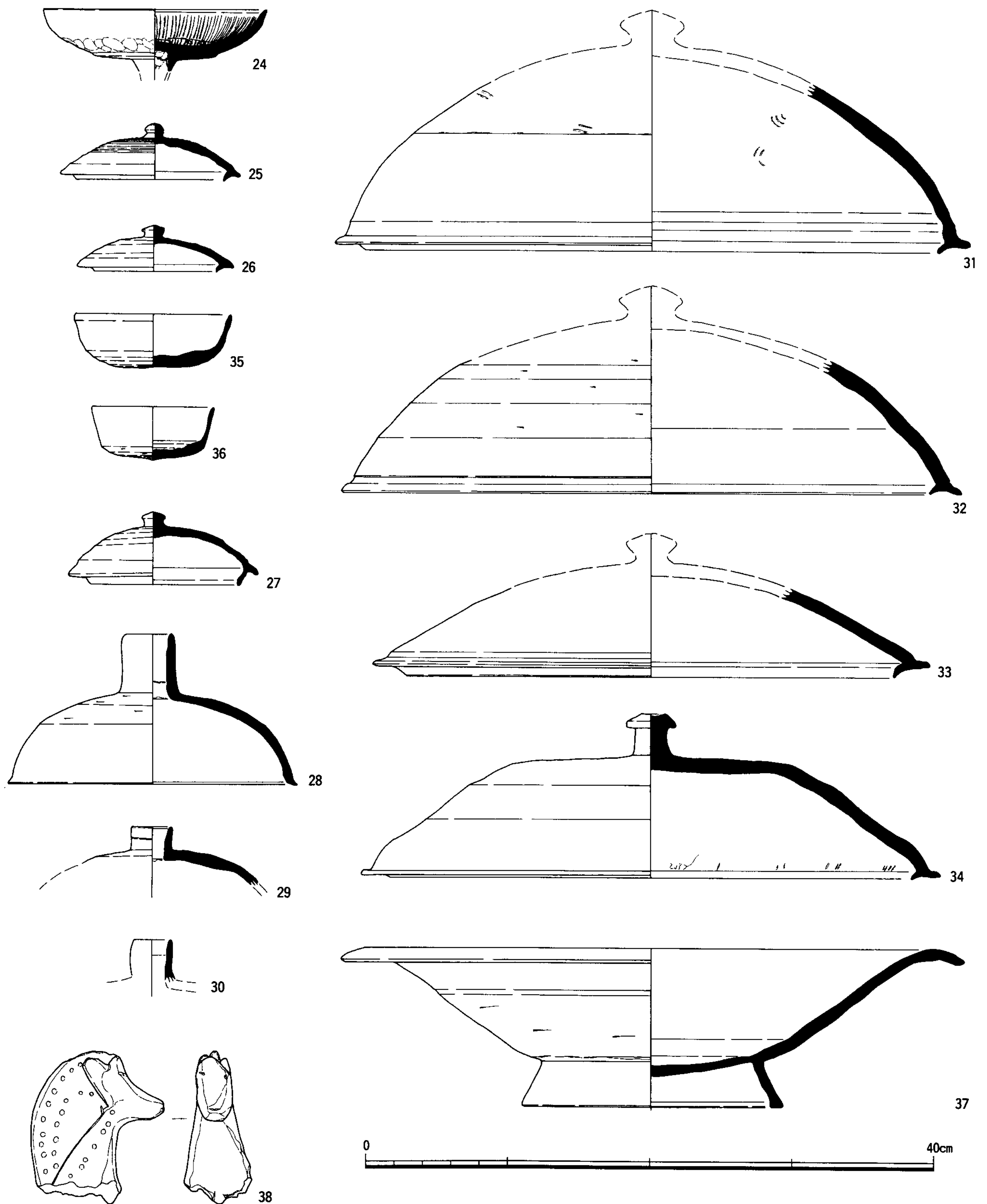


図105 茶灰色砂質土出土土器 1:4 (38は1:3)

須恵器蓋 (25~34) のうち、(27)は器高の高いもので、壺の蓋と考える。青灰色。口径13.4cm、器高5.1cm。(28)~(30)は半球形の蓋部に筒状の突出部をつけた形態のもので、異形の蓋と考える。生産地を考える上では、類例として奈良県明日香村水落遺跡、大阪府堺市陶邑窯跡群

KM60号窯・TK321号窯、岡山県瀬戸内市西谷遺跡No. 10土坑出土資料があげられるが、水落遺跡、陶邑窯跡群の例は筒部が短く、先がすはまる点で異なる。西谷遺跡例は法量、形態の面から一致する点が多い。ただし、胎土、焼成は異なっている。

生産地の検討に加えて、使用方法も課題の一つである。全形がわかる(28)をみると、口縁端部が斜めにつまみ出されており、本報告ではこれは甕や壺の球胴に合わせたのではないかと考えて蓋と考えたが、形状からは上下を反転して漏斗として用いた可能性もある。出土資料の痕跡の観察をおこなったが、現状では使用方法に関する知見は得られていない。(28)は外面上半部に回転ケズリをおこなう。青灰色。口径20.2cm、器高10.5cm、筒部径3.2cm。(29)は軟質の焼成で灰白色。筒部径2.9cm、残高3.9cm。(30)も同様に軟質の焼成で灰白色。筒部径2.5cm、残高2.8cm。(31~34)は大型のものである。(31)は内外面ともにナデ調整をおこなうが、上半部の外面に平行タタキ、内面に同心円状当具の痕跡をわずかに残している。青灰色。復元口径44.6cm、残高11.8cm。(32)は上半部外面に回転ケズリをおこなう。灰色。復元口径43.6cm、残高9.3cm。(33)は外面に厚く降灰しており、調整は不詳。青灰色。復元口径39.0cm、残高6.2cm。(34)も外面は降灰がみられ、上半部に回転ケズリをおこなう。青灰色。口径36.4cm、器高11.5cm。

須恵器杯G(35・36)は大小がある。(35)は底部に回転ケズリをおこなう。灰色。口径11.0cm、器高3.7cm。(36)は最も小型のもので、底部はナデをおこない工具による切り離し痕跡を残す。口径8.6cm、器高3.7cm。

須恵器盤(37)は浅い盤にやや高い脚部をつけたものである。口縁部は外反する。盤部外面の下半部は回転ケズリをおこなう。脚部は焼成時に大きく歪んでいる。灰色。口径43.5cm、器高11.1cm。

土馬(38)は頭部のみの出土である。粘土塊で首を作り、これに粘土板を取り付けてタテガミを表現する。続いて耳を両側に取り付け、最後に円形の粘土で首とした粘土塊を挟み込むようにして頭部を作っている。ヘラ状の工具で細い目をつける。首筋に1条、タテガミに2条、細い竹管状の工具によって刺突をおこない、装飾する。残高7.9cm。

瓦 丸瓦181点(14.2kg)、平瓦739点(45.3kg)が出土している。いずれも北区北部での出土が大半を占めている。

軒瓦は、いずれも軒丸瓦で、4点が出土した。全て角端点珠型式のもので、素弁八弁蓮華文の石神A型式、素弁11弁蓮華文の飛鳥寺V型式、VI型式、素弁九弁蓮華文の飛鳥寺Ⅷ型式がある。

4 ま と め

本調査では、沼沢地の性格および調査区周辺の土地利用のあり方について新たな知見を得ることができた。従来、沼沢地とされてきたものは、流路である可能性が高い。遺跡周辺の現状は、北方および西方へ下がる緩斜面であるが、整地がおこなわれる以前は谷が入り起伏のある地形であったことが想定できる。少なくとも古墳時代中期には谷は埋没をはじめており、残存していた起伏も飛鳥時代には整地されて現在みることのできる平坦な地形に変貌した。

第15・16次調査の所見によれば、この整地はA期の中央建物群をB期に建て替えた時点でおこなわれたものと考えられてきた。しかし、整地土中の土器は古墳時代に属する少数のものを除けば、時期差はわずかと考えることができる。これらを整地の時点における廃棄とすると、整地の段階は従来の想定より若干遡ることとなる。この時期には、既に小墾田宮や飛鳥寺といった大規模な宮殿や寺院、石神遺跡の饗宴施設などが機能しており、周辺の発展とともに尾根や谷などの地形を残していた部分も整地を進めたのであろう。施設の拡充に伴う土地需要の増大や、政治的中心地としての飛鳥の整備がその背景にあるとみられる。現在我々が見る飛鳥の景観の基礎は、このような大規模な土木工事によって形成されたものであった。

反面、調査区周辺においてはこれらの大がかりな整地以降も遺構の存在は希薄であり、石神遺跡の中心施設群の北方は、基本的には溝や堀がある程度の空閑地であったことを示している。

出土遺物は装身具や調度に用いられた原料等の工房関連資料や、多様な食器類を主とする。近隣より運ばれ、廃棄されたものであり、周辺における当時の活発な活動の一面をうかがわせる。

遺跡の北方に存在が想定されている阿倍山田道については、本調査区内では確認できなかった。その位置については、現在の県道桜井飛鳥吉野線付近と、そのやや南方に想定する見解があるが(西口壽生「石神・小墾田・山田道」『明日香風』79号、2001年)、さらに北方の調査の進展に委ねられることとなった。今後の成果に期待したい。

(金田明大)